

2012年ロンドンオリンピック報告

2012年10月1日
オリンピック特別委員会
代表選手団役員一同

目次

1. ロンドンオリンピックまでの強化策

- (1) 選手活動環境の整備・充実
- (2) ランキングシステム
- (3) 体調管理と栄養管理(事項)
- (4) アンチドーピング活動
- (5) 広報活動の展開
- (6) プロテスト力の向上トレーニング
- (7) 海外遠征と海外合宿の充実

2. 日本代表選手選考とオリンピック対策

- (1) 日本代表選手選考
- (2) オリンピック本番対策
- (3) マルチサポート実施事項

3. 現地でのコンディショニング

4. 各種目の試合経過と戦評

5. 競技の総評と評価(反省)

6. 2016年リオ・オリンピックに向けた課題と取り組み

7. その他

7月27日から8月12日まで英国・ウェーマスで開催された第30回ロンドンオリンピックセーリング競技日本選手団活動について以下のとおり報告します。

2012ロンドンオリンピックセーリング競技日本選手団役員				2012年9月29日
役職	氏名	所属	ADカード 取得者	大会期間中の主な役割
団長	河野 博文	JSAF 会長		大会視察: 8月1日～11日 (ISAF VIP懇談、2020東京招致)、村外応援者対応
副団長	西岡 一正	JSAF 副会長		事前合宿視察: 7月17日～25日、大会視察8月3日～8日、村外応援者対応
GM	山田 敏雄	オリンピック特別委員会 マネージメント委員会 委員長		全体総括(現地JSAF本部責任者、村外にて庶務活動)
監督	中村 健次	オリンピック特別委員会 委員長 ナショナルコーチ	○	村内、会場内での統括(各種目サポート)
総務	斉藤 愛子	JOC専任情報・科学スタッフ	○	村内、会場内での総務全般
コーチ	小松 一憲	アビームコンサルティング	○	470級男女コーチ
コーチ	佐々木 共之	ジュニア・ユース強化育成委員会 委員長	○	ラジアル級コーチ
コーチ	関 一人	オリンピック特別委員会 委員	○	RSX級男子、49er級コーチ
コーチ	宮野 幹弘	JOC専任コーチングディレクター (トップアスリート担当)	△	RSX級女子コーチ(TVP(トレーニングベニューバス)にて毎日会場入り)
コーチ	飯島 洋一	オリンピック特別委員会委員 アシスタントナショナルコーチ		ラジアル級事前練習パートナー、大会期間中は村外庶務担当
広報	浅野 英武	オリンピック特別委員会 広報・事業小委員会委員長		広報業務進行管理
トレーナー	江口 典秀	JOC専任メディカルトレーナー		選手コンディショニング(ケア)
トレーナー	前田 規久子	国立スポーツ科学センター		選手コンディショニング
栄養士	武田 哲子	オリンピック特別委員会 栄養管理担当		選手への食事提供及び体重管理(事前合宿及び大会期間中)
栄養士	近藤 衣美	国立スポーツ科学センター		選手への食事提供及び体重管理(事前合宿対応)
潮流調査	早稲田研究室	東京大学大学院海洋技術環境学専攻		潮流モデルの作成、選手への情報提供(本番前に作業終了)
風調査	鹿取 正信	ノース セール ジャパン		現地海上の風傾向(癖)の情報提供(事前合宿まで対応)
気象予報士	岡本 治朗	オリンピック特別委員会委員 気象アドバイザー		日々の天気予報、中期予報の提供
マルチサポート	居石 真理絵	国立スポーツ科学センター		マルチサポート統括(コンディショニング担当)
マルチサポート	松岡 けい	国立スポーツ科学センター		海外渉外、翻訳・通訳、情報提供、外部応援者対応
マルチサポート	藤原 昌	国立スポーツ科学センター		情報収集、情報管理・提供
マルチサポート	萩原 正大	国立スポーツ科学センター		情報収集、マルチサポート備品管理、外部応援者対応

1. ロンドンオリンピックまでの強化策

2004年アテネ以降「セーリングチームジャパン」として万全の組織力をつけていくことを主眼に置き、2008年北京以降さらなる組織体制を強化し、国際競技力向上を目指すとともに、ロンドンオリンピックの目標として「メダル獲得、複数種目入賞」を掲げた。

日本のスポーツ文化を支える企業スポーツ活動も経済環境の変化等により20年前ほどから衰退し始め、オリンピックを目指すアスリート数も大幅に減る中、セーリングもいかに選手強化を進めるか、そしていかに世界との競争力を向上させるかが大きな課題となっていた。そのためには競技団体(以下: NF)が魅力ある強化プラン、サポート体制を構築する必要があった。

結果的に北京では企業チームとNF双方が終始「戦うための価値観」を共有することができ470級男子が7位入賞を収めることができた。さらに2009年以降にはそれを一歩進め「世界と戦える選手」(NFオリ特、選手ランキングシステム上位者)にあえて対象を絞り、

選手間の切磋琢磨を求めるとともに、彼らの競技活動環境の充実と強化推進のための「選択と集中」も実施した。

そして、その成果のひとつとしてマルチサポート（国家事業）の支援を受けることが叶い、かつてない練習環境やコンディショニングサポートを受けることが出来た。これは 470 級男女のこれまでの活躍による文科省のターゲット A 種目（メダル獲得の期待がある）認定によるもので、北京オリンピックをしのぐ国のセーリング競技への「サポート・バックアップ」を受けられたことはまことに幸いなことであった。

これらの支援は絶大なもので「人・もの・道具・情報」など、この 1 年間およびオリンピック期間中を通してほぼ完璧なチーム支援体制を構築することができた。道具開発、各種調査の実施、加えて会期以前から長期にわたり管理栄養士、トレーナー、そして情報スタッフが現地入りするなど、文字通りのソフト・ハードのフルサポートが実現できた。

*** 詳細は後述「マルチサポート実施事項」参照**

さらに、フィールド面では NF と企業チームとの連携を図る試み、コーチ陣の指導力レベルアップを図る取組みも試みた。またフロント面でも多岐にわたる業務を円滑に進めるために専門職など適材適所の人材の配置もおこなった。

(1) 選手活動環境の整備・充実

アテネ以降の継続事項として選手個々の努力で世界を目指していた環境を改善するために、物流と補助体制などマネジメント業務をチーム全体で連携することにより、選手のコスト負担を少なくすることが可能となった。

選手が競技活動を円滑にできるように体制を整えることを目的に実力選手の受け入れ先を探し、可能性をもった選手が努力すれば目標達成ができるという環境整備に取りかかったが具体的な成果は挙げられなかった、これは今後も継続して取り組まねばならない。

また、ナショナルチーム（以下:NT）としての強化合宿を増やし、チーム・選手個別のコーチだけでなく、種目別 NT 担当コーチが指導・アドバイスする体制を作り始めた。さらに企業チームからの人材が強化組織内部に入るようにし、チーム全体のレベルアップに努め、種目別の横断的なつながりも強化しオリンピック本番での団結力を作ることを目標とした。

(2) ランキングシステム

アテネ以降、経験値で判断していたオリンピッククラスの実力評価を改めるべく、国際的にトップレベルにいる 470 級男女を強化の軸におき、国内で活動しているオリンピッククラス 8 種目に対して、そのクラスおよび選手の国際レベルでの力を参加艇数の違い、参加国数の違いなども考慮にいれ、各世界選手権の成績から個々の実力を判定するランキングシステムを導入した。メダルおよび入賞が狙える種目を見極めていく上の有効な手段と考えた。またランキングシステムによって艇種別および個人別ランキングが明確となり、海外遠征等における支援内容に反映（差別化）することが可能となった。

■「選択と集中」の履行（執行）

北京終了2年後の2011年度より、上記ランキングシステムを基に各種目上位NT2チームに対し、より優遇（差別化）した活動環境（遠征費用等の補助支援等）の付与をおこなうこととした。世界上位チームに対等でき得る環境支援となった。

(3)体調管理と栄養管理(事項)

個々にまかせていた体調管理についてもアテネ以降も継続し、国立スポーツ科学センター（以下：JISS）でのアスリートチェック、運動能力の向上、負傷や疲労に対するケア、栄養や水分補給などの体のコンディショニング作りに着目し、従来通り年1回JISS合宿を行い、トレーナー、管理栄養士帯同によるNTとしての講習を行った。こうした取り組みによって海上トレーニングだけでなく、フィットネスに対する選手の意識が変わるものと考えた。

*** 添付「資料 1.3.4.5」参照**

(4)アンチドーピング活動

アンチドーピング活動は、早くからADAMSを導入し、NT選手にはJISS講習時を利用して当該薬に関する指導をアテネ以降継続して徹底した。これまではオリンピック選手レベルに限りドーピングコントロールを理解していたが、これらの指導教育によって抜き打ち検査にも対応できる体制を整えた。

(5)広報活動の展開

オリ特のロンドンオリンピックキャンペーンを内外に知らしめる「広報活動」の柱は一つに「HPをフル活用した情報発信」、二つには「メディアへのきめの細かい情報発信と対応」であった。

それぞれについてはオリ特メンバー全員の“広報活動の重要性に対する高い認識”に支えられ質・量ともにほぼ構想通りの成果を上げることができたものと考えている。

■HPをフル活用した情報発信

HPについてはコンテンツの充実を図り、ロンドンオリンピックに向けたオリ特の組織的動向、考え方、方向性などのフロント情報を適宜発信、またフィールドにおける強化推進活動、内外の強化遠征活動などの姿を迅速かつ正確に伝えることに注力した。HPへの閲覧誘導を増進させるため写真および映像の質的向上を心掛けた。各国際大会レポートなどにおいても単に結果をレポートするだけにとどめず、参加選手の声、担当コーチのコーチングコメントなども多用して、閲覧する一般セーラーの競技力向上に参考となる技術評価・アドバイスなども掲載するようにした。オリンピック前年にはプレオリンピックのタイミングで「ロンドンオリンピック情報ページ」の充実を図った。各方面から求められるほぼすべての情報を網羅した。オリンピックキャンペーンを盛り上げるために、専属映像カメ

ラマン撮影の動画も数多く扱い、セーリングの躍動感とその魅力を存分にアピールした。動画導入により閲覧者の数は飛躍的な伸びを見せた。

また、JSAF-WEB マスターおよび J-SAILING ブログ担当者とは常に連携し、情報の効果的な伝播への協力を仰いだ。

本番においては現地発レポートとして臨場感を重視したデーリーレポートを競技写真ともども発信した。選手らの協力によりレース後の生の声を載せることができたのは幸いであった。

■メディアへのきめの細かい情報発信と対応

日頃のメディアリレーションを元に、広範囲なジャンルを網羅したオリ特メディアリストを作成し、北京大会以降機会あるごとにプレスリリース（HP と連動）を発行した。

JSAF は有力選手を擁していることもあり、メディアからの問い合わせ、照会、取材希望がオリンピック前年から殺到し、その対応に追われた。「わかりにくいセーリング競技」だけにメディアへの説明・解説はできる限り懇切丁寧におこなうよう心掛けた。

オリンピック年の今年は 5 月 24 日赤羽の「味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）」にて日本代表選手団発表記者会見を開催、新聞、テレビなど 200 名を超えるメディアが出席した。

本番が近づくにつれ、メダル候補選手に対して過熱気味のメディアであったが、その中でも「マルチサポート事業」に絡めた取材が多くあったのが印象的であった。また、各選手の出身地のメディアが当該選手らを長期にわたりフォローしていたこともオリンピック大会ならではのであった。

本番期間中は現地本部に広報担当者が駐在して連日プレスリリースを発行、日本およびロンドンからのメディア対応にあたった。

(6) プロテスト力の向上トレーニング

アテネ以降の継続として国際競技ルールの確実なる習熟をはかるとともに、英語によるプロテスト力向上を目的に 2006 年 JISS 合宿時より、NF ルール委員会と NF インターナショナルジュリーの協力を得て実践講習会を実施した。国際大会におけるプロテスト（抗議）に対する語学対応力を含め、NF 作成「ルール虎の巻」を NT 選手に配布し、オリンピックを含めた国際大会において活用することを指導した。

(7) 海外遠征と海外合宿の充実

国際セーリング連盟（ISAF）主催の国際競技大会に出来る限り出場し「レース感を研ぎ澄まし、レース勘を養うこと」を重点に海外遠征を行った。また、ロンドンオリンピックのセーリング競技会場である英国・ウェーマスの大会には優先的に参加した。同時に、ウェーマスの地が「ホーム」となることを目指した長期合宿も実施した。（4 年間でレース参加、合宿でほぼ 200 日）

2. 日本代表選手選考とオリンピック対策

(1) 日本代表選手選考

セーリング 10 種目は 2011 年世界選手権（全種目がオーストラリア・パースで同時開催）で各種目の国枠 75%、2012 年世界選手権（3 月～5 月にヨーロッパ各地）で 25%を割り当てて、国枠獲得の予選となった。

日本は 8 種目で国枠取得を目指したが、2011 年 12 月のパースで 470 級男女、RS : X 級男女、ラジアル級の 5 種目が国枠を獲得した。この時点で 470 級女子の近藤愛・田畑和歌子組のみが規定成績に達したので、日本代表内定となった。

パースで枠をとった RS : X 級男女は 2012 年 3 月に世界選手権（スペイン）が開催され、日本人最高位をとった男子の富澤慎と女子の須長由季がともに代表に内定した。470 級男子は 5 月に世界選手権(スペイン)が開催され、原田龍之介・吉田雄悟組が内定した。レーザーラジアル級は 2 月に神奈川・葉山で NT 選考レースを行い、その結果により NT 選手の入替えを行った後、5 月の世界選手権(ドイツ)に参加、最上位をとった土居愛実が代表となった。

パースで枠がとれなかった 49er 級、スター級、レーザー級は、2012 年 5 月の世界選手権で再度枠取得に挑戦、クロアチアで開催された 49er 級世界選手権にて牧野幸雄・高橋賢次組が国枠を獲得し、日本代表に内定した。スター級とレーザー級は国枠が取れなかった。

ロンドンオリンピックには 63 か国が参加し、フランス、英国（開催国枠）、米国の 3 か国のみが全 10 種目に出場した。また、14 か国が 1 種目のみの参加であった。日本は上記の 6 種目 9 名の選手が参加となった。

(2) オリンピック本番対策

セーリング会場のウェーマス・ポートランドを「ホーム」にすることを目標として、準備を整えた。2009 年から遠征を繰り返し、オリンピック本番時には選手もスタッフも「ウェーマスへ帰ってきた」と感じるようになった。

■現地練習と練習拠点の確保

2009 年夏から毎年 7～8 月に現地練習と大会レースに参加した。練習拠点をキャッスルコーブセーリングクラブ（以下：CCSC）へ置き、周辺のホリデー用貸家を確保し、自炊しながらの長期滞在と練習環境を作った。いくつかの物件は 4 年を通して同じものを選んで利用した。

■潮流調査

北京オリンピック前から実施している事項で、英国とフランスを隔てるドーバー海峡（最狭部）は潮流が速いことで知られる海域であり、また、そこに接するウェーマス湾にはポートランド（島）が突き出ており、レース海面での強さ、向きの差が大きいことから、北京オリンピック時に協力を仰いだ東京大学・大学院（海洋空間計画研究室）プロジェクトチームに再度調査依頼をおこない、専門家グループの協力を求めた。北京では短期間調査

だったため、細部にわたる調査ができなかった反省から今回は 2009 年より 3 回にわたり、現地調査を行った。コンピューターによるモデルシミュレーションも合わせて実施し、2012 年 6 月のレース、合宿にてデータをまとめ、本番で配布する資料を作成した。

*** 添付「資料 6」参照**

■ 事前合宿と現地入り

6 月第 1 週に本番時と同一海面でワールドカップ大会であるスカンディナヴィア選手権が開催され同大会への参加、引き続き、第 1 回代表現地合宿を実施、6 月末は一時帰国、その後 7 月 9 日から第 2 回現地合宿を 7 月 26 日まで実施した、7 月 16 日には AD カード保持者全員が選手村に入村、本番準備を行なった。

第 1 回合宿時から選手には昼、夕食の日本食が準備された。練習拠点であるキャッスルコープセーリングクラブ (CCSC) から徒歩 3 分の場所にサポート宿舎を確保したので、効率よく利用できた。

7 月 16 日の入村以降は、マルチサポートのセーリングサポートハウスを選手村から徒歩 10 分の所へ開設し、オリンピックが終了するまで選手への食事サポートを続けた。

■ 現地ホスピタリティー (日本からの応援者対応)

大会会場のウェーマスは日本から遠く、またロンドンから 3 時間離れた場所であったにもかかわらず、全選手の家族・友人を始め、述べ 60 名以上の方が応援に来られた。

今大会ではオリンピック・セーリングを「スペクテーター・スポーツ」にすることにより、大会側が非常に力を入れ、オリンピック・セーリング史上初の観覧スタンド「Nothe Stand」が設置された。Nothe スタンドでは 4500 人の観客が陸上からセーリング競技を観戦することができ、風向によってはスタンドに非常に近い場所でレースが行われ、と同時に会場の巨大スクリーンでライブ映像とコメンタリーが観戦をより一層充実させた。

選手は自身が出場するレース日につき 2 枚の観戦チケットが購入できるシステム

「Family & Friends Ticketing Program」が大会より導入されたことから、ほぼ全選手がこのシステムを利用し、家族・友人のチケットを手配し、日本からの応援者はほぼ全員この Nothe スタンドで競技を観戦された。

Nothe スタンドの他に、JSAF 本部(Sea Tower)と日本チームの練習拠点であったキャッスルコープセーリングクラブの 2 ヶ所で日本独自の応援者観戦対応を行なった。

JSAF 本部はウェーマス・ベイ海岸沿いにあるコンドミニウムに設置し、そこから West レースエリアが展望できたことにより、日本からの応援者にも開放、望遠鏡は必要であったが、West レースエリアのレース観戦を楽しんでもらえた。

CCSC では Harbour レースエリアがセーリングクラブ前の海面で行なわれ、ここも日本からの応援者にゲストとして利用して貰った、CCSC ではクラブハウス内にテレビスクリーンが設置され、BBC で放映されていた Nothe コースのライブレース映像が見ることができ、クラブハウス外のデッキ上では望遠鏡で Harbour コースの観戦ができた。加えて、CCSC メンバーには Harbour レースエリアの 50m 外まで行ける地元艇用のパスが発行され、これ

を日本チームとして2枚確保し、ゴムボート2艇を選手家族優先の観覧艇として運行した。9選手中8選手の家族・親戚・友人が応援する選手のレースをこの観覧艇で観戦することができ、陸上よりは少し近い位置で臨場感ある観戦ができた大変喜ばれた。

JSAF本部には1~2名のスタッフが常駐、CCSCでは2艇のゴムボートにそれぞれドライバー1名、クラブ内対応として1名、計3名のスタッフで対応した。

この様に今大会では3ヶ所で日本からの応援者は観戦ができ、オリンピック観戦経験としては大変充実したものになったと思う。加えて、ロンドンから3時間という会場であったため、希望者にはヒースロー空港からのピックアップサービスや宿泊の手配なども連盟サイドで行った。その結果、選手からは自身の応援者に対するケアや心配がなく、競技に専念ができたという声が多く寄せられ、ホスピタリティーとしては十分な成果が得られたと考えている。

(3)マルチサポート実施事項

本報告書前文のとおり、マルチサポート事業対象種目(470級)に選抜され、多方面の有識者、専門家の協力を得てコンディショニング全般、癖のあるウェーマスの風調査、ヨットのエンジン部分となるセール開発、さらにはセールパフォーマンスを引き出すマスト開発に焦点を合わせて取り組むこととした。また、長期的展望から470級の艇性能解析もおこなった。

■コンディショニング全般

***添付「資料1.3.4.5」マルチサポート報告書 参照**

■セーリングサポートハウス

ロンドンオリンピックセーリング競技は会場がサテライト(ウェーマス)であることから、ロンドン本村と同等の選手サポートの希望(マルチサポートの申請)を行ったが、なかなか認められず根気強い交渉が必要であった。結果的にサポートプランが認められ選手への最大限のサポート(栄養・ケア・情報提供)が実現した。

7月16日から選手村に近い場所に開設、フィジカルトレーニング、マッサージ、栄養サポート、コンディショニングチェックを行った。サポートハウスがあるアパート群にはプール、ジャグジー、ストレッチスペースもあり、利用した。

栄養サポートの食材については、地元スーパーマーケットでの買い出しに加えて、サザンプトンから日本食材の宅配を利用、その他日本から手分けして持参したものを使用した。

***添付資料「1.3.4.5」参照**

■風調査

ウェーマスのレース海域は風向によっては地形の影響が出やすい、ローカルな地形変化による特徴があると考えられることから、専門家主導のもと2年間をかけて風質の測定船5艇で実際の風を測定した。

測定した風データおよび web で一般公開されている地元固定風速計のデータも合わせてコンピューターにインプットし、それぞれの特徴を整理して「見えない風」を「見える風」に地図上に流線で表し、ウェーマスの風の傾向や癖を整理解析した。短期間での準備ながら、膨大な情報をコンパクトに纏めた。

レース海域の気象情報として本番前年および本番ではセーリングキャリアを持つ気象予報士を帯同し、細部にわたる日々の気象・海象予測情報を選手・コーチへ提供をした。

大会本番時には風情報との連携を行ない、必要な情報を選手に伝えることができた。

*** 添付「資料2」参照**

■ マスト開発

マルチ研究開発事業要望（2010年9月提出）の承認が遅れたことにより2011年8月より研究開発委託先（ノースセール・ジャパン）有識者とミーティングを行い、開発マストのコンセプト・ねらいを明確にした上で設計・製造に着手。2012年1月に新マストが完成した。しかし、その時期にはすでに各種目のオリンピック選考が始まり、470級男子についても2012年世界選手権（6月・スペイン）が最終選考会であることから、この新タイプのマストを積極的に使うことへのNTチームのためらいがあったことは残念であった。

とは言え、男子日本代表になった原田・吉田チームはイエールオリンピックウィーク（強風シリーズ）、470級世界選手権（全風域）ではこの新マストを果敢に使用し両大会で6位の成績を収め、一定の成果（新マスト効果）を上げたものと思われた。

しかしながらオリンピック本番では練習・試合における使用期間の短さから選手が当該マストを使用しない意向を持ち、最終的にはチームの判断として従前からのマストを選択したため、残念ながら本番ではその真価を確認するには至らなかった。

*** 添付「資料2」参照**

■ セール開発

ロンドン代表選手が決定するまで各チームがチーム毎にそれぞれのアプローチを行っていた。代表決定後にオリンピック直前の7月の半ばから末に掛けて、調整を行った。2ボートテストは、GPSを使ったテレメーターシステムとマストトップに据え付けられたカメラ、コーチボートからのカメラを使った（ノースセール社製のシステム）を用いて、ボートスピード、セールシェープの両面から解析されセールシェープのファインチューニング、風域毎のチューニングなどを実施した。

*** 添付「資料2」参照**

■ 470級艇開発（性能解析）

ロンドンスペシャル470艇の開発を目的に4艇を購入した。まずは世界で一番使用されているビルダーのマッケイ艇（ニュージーランド製）と、各国選手が近年注目を寄せているナウティベラ艇（イタリア製）の性能解析を実施（添付資料参照）した。この研究（性能解析）開発を進める中で、時間的に困難で有る事から艇建造計画は実質見送りとなった。

*** 添付「資料2」参照**

3. 現地でのコンディショニング

■ 競技会場内

6 種目以上の参加で、コンテナ 2 個分のスペースを確保できた。40ft コンテナ 1 本は北京オリンピックで作ったチームコンテナハウスを日本から運びこみ、チームのベースとした。コンテナにインターネット回線（レイトカード申請）を引き、WiFi を設置したので、携帯端末を効率よく利用できた。映像録画、レースの進行状況を確認、様々な情報収集が苦勞なくできた。今回はチーム全体での情報共有を「ハンドブック」(JISS)を利用したが、コンテナにも掲示をして確認するようにした。

また、32ft コンテナはマルチサポートの一環で地元でのレンタル、半分をアップ・クルルダウン用ストレッチスペース、スピンバイク置場とし、残り半分に作業台と予備品、工具の保管場所とした。

*** 添付資料「1、3、4、5」参照**

■ セーリングサポートハウス

*** 添付資料「1、3、4、5」参照**

■ 医療関係

事前にロンドン選手村（本村）ドクターとの連絡網、分村医務室、競技会場医務室等確認をしていたが、実際には病気、怪我共になく、無事に大会終了まで過ごすことができた。ウェーマスでは歯科治療に選手、スタッフが 1 名ずつ掛かったが、設備も整っており問題はなかった。ただし、歯科医は日本語が通じないと治療が難しいこともあり、改めて、歯科については現地入りする前に問題を解決しておくことの必要性を感じた。

4. 各種目の試合経過と戦評

各種目とも 10 レース (49er は 15 レース) を行い、上位 10 艇のみが第 11 レース目 (49er は 16 レース目) となるメダルレースに進出する。今大会が通常のワールドカップや世界選手権と異なるのは、7 月 29 日にフィン級がレース開始をしてから 8 月 10 日に 470 女子が終了するまで 2 週間近くにわたりレースが実施されていること、途中で予備日が 2 回設けられている点である。レースのスケジュールとエリアについては、予定が決まっているものの、スタート時刻については前夜 20 時までには発表という流れであった。特にたいへんだったのは、テレビ中継が入る種目のスタートが遅れることになり、12 時予定で公示されていたものが実際には 15 時からに変更になったりしてルーティンでスタート前の準備をすることが、時間をもてあます時もあり、種目によって調整が難しい日があった。

レースエリアのローテーションについては事前に通告もあり、2010 年からウェーマスで実施された大会でもテスト済だったので、準備はできていた。全体で 5 海面（エリア）を用意しており、Nothe、Harbour、West の 3 エリアがテレビ中継に使われた。レースはほぼ予定どおりに実施され、大会期間中は気象条件に恵まれた。ウェーマスは予想通り、15 ノット前後の日が多かったが、後半には 10 ノット以下の風が弱い日もあり、選手にとって

はオールラウンドの能力が問われる大会であった。

セーリング競技では初めての試みとして、観客席のチケット販売（Nothe エリア）、大画面での中継、競技のテレビ放送の生中継（メダルレース）に取り組み、見事な成果をあげた。

◆ 470 級男子(原田 龍之介・吉田 雄悟)

8月2日から7日に10レースを行い、10日（気象条件により9日から延期）がメダルレースであった。原田・吉田組は初日のNothe エリアから始まった。Nothe は陸に近い場所にレースコースを設定するため、風の通り道が丘や海岸線に沿ってきまってくる。先に有利な側へ風を取りにいかないと不利を招く先行有利な条件である。

第1レース、スタートから飛び出すことができなかった原田組は19位と出遅れた。場所をWest エリアへ移動してからの第2レースは途中6位で走る場面もあり、本来の走りを取り戻したかに見えたが、後半に競り負けて12位まで後退した。2日目の第3レースはいいところがなく、第4レースでも3位で走っているが後半に12位まで後退し、上位をキープする自信が持てなくなってきた。3日目の第5レースでは7位でフィニッシュできたが、途中の2位をキープできず、続く第6レースでも7位から11位に。接戦の中で生き残れず、トップ5で走りながら後半に順位を落としてしまうことを重ねて、あせりが生まれた。

8月5日は休み。気持の整理をして臨んだ8月6日の第7レースであったが、平均12ノットと、本来原田組が得意とする風域で21位を取り、さらに厳しい状況に追い込まれてしまった。このレースも第1マークは7位で、悪くない展開であったが、周回ごとに順位を落としてしまい自信を持てなくなってしまう。原田の思い切りの良さが影をひそめてしまった残りのレースは定位置となりつつあった15位前後から抜け出すことができなかった。

470級男子については、各国の取り組みがこれまでと大きく変化している。北京オリンピックの事前練習から、コーチがまとまってレース練習を運営するようになったのだが、今回は事前に英国コーチが中心となり、計画立った練習レースを4回行った。この練習を通して接近戦の技術をあげ、ルールの確認をしつつ地形の影響を受けるレースエリアでのレース展開での確認を行い、最後の仕上げをしてきた。「敵に手の内を見せない」というスピード競争をターゲットにしてきた以前の準備から考えると、今回は「本番で失敗しないための接戦練習をトップレベルで行う」という点で大きな変化があった。現場コーチも最近まで現役選手だったというメンバーが増え、選手が技術的にも最新情報でレベルアップしてきた。最後に勝負を分けたのは、接戦の中でトップスピードを有して走る技術を持ったチーム、特にダウンウィンドが速いチームが上位をキープすることができたと思う。

原田組は10レーストータルで18位となり、メダルレース出場は叶わなかった。1位のオーストラリアは2011年から負けなしの強いチームで、下馬評どおりの金メダル獲得といえる。銀メダルは英国代表で2009年世界選手権では最後まで原田組と銀を争ったライバルであった。今年5月の世界選手権でも6位に入った原田組ゆえに、メダルレースに残れな

かったことに悔いが残る。

「孤軍奮闘」で銅メダルを獲得したアルゼンチンの「本番前の最後の集中」を見習いたい。

◆ 470 級女子(近藤 愛・田畑 和歌子)

8月3日から8日に10レースを行い、10日がメダルレースであった。7月26日までフィジカルトレーナーが現地で最後の調整を行い、海上練習も艇の準備も納得のいくようにできた。ただ、いつもと違うのは、470男子と女子の初日がずれていること、スケジュールがずれているゆえに、予備日も異なることであった。

近藤・田畑組の初日は順調な滑りだしであった。チームを組んでからほとんどの大会でメダルレースに進出している経験から、1レース平均を10位以内でキープしていくというのが毎日の目標だった。

2日目にピンチ到来。第3レースではリコールの遅れを挽回できず17位。続く第4レースではスタートから抜け出して1位を走っている時にメインセールが落下してしまうという想定外のトラブルがあり、落ち着いて処理して帆走に復帰したものの、19位。大きな借金を1レースごとに返していくことになってしまった。

3日目以降、少しずつ返していくものの、メダルを狙う上位チームは手堅く失敗がないことを目の当たりにしてしまったのか、あせりから細かいミスがでるようになってしまった。それでも第8レースで7位をとり、総合でも10位に上がり、メダルレースに残れるところまで取り戻した。ほっとしたところに、ブラジルから抗議が出て、近藤組が進路妨害で違反、審問の末、近藤組は7位から一転の失格となった。

気を取り直して残りのレースを戦ったが、10レース中、大きなミスが3回あっては、取り戻すことは難しすぎた。まさかの総合14位となりメダルレースに残れなかった。セーリング競技は自然を相手に戦うので、想定外のことが起こってしまう可能性がある。(そうした競技の特性から10レース実施した場合、ワーストの1レースを除外することができるような仕組みになっている：捨てるレース) その一つであるメインセール落下のトラブルは未然に防ぐ事は出来なかったのか、日々のチェックはされていたのか、あってはならない事が起きてしまい残念である。

レース前半から捨てるレースを自ら作らずにいなければ、メダルは狙えない。470級女子の上位3艇(ニュージーランド、英国、オランダ)は失敗の少ないチームであったが、本来は近藤組もその1角をなしていたはずだ。プレオリンピックで優勝した時にはノー・トラブルで、特に大きく崩すことがなかったことが強みだった。

オリンピックでは艇数が少ないことから、抗議・審問での失格が大きく響く。どの国もチャンスがあれば抗議を出して、相手をつぶすということを重視する。近藤組が失格した状況では、権利をもつブラジルに対して不利な状況を覆すことは難しかった。他の大会ならうやむやになって抗議されないような場面だったかもしれないが、オリンピックだからこそ、ブラジルは抗議してきたと考える。

悔いが残るが、オリンピック本番でのライバル国からのマークに対して甘かったこと、2日目の動揺をひきずりながらのレースで、スキをつかれてしまった。

残念ながら最後の最後でチームとしての「ひ弱さ」を露呈してしまったと言わざるを得ない。

◆ 49er 級(牧野 幸雄・高橋 賢次)

7月30日から8月6日まで15レースを行い、8月8日にメダルレースであった。オリンピック種目の中で一番人気のクラスだけあり、テレビ中継も多かった。

牧野・高橋組は国枠の予選をぎりぎりでも通過しており、上位選手との差が埋められていないまま本番となった。15ノット以上の風は苦手な風域であるが、少しでも上位に食い込むことを目標に練習を重ねた。

今回は15レース中、前半の12レースが15ノット以上で行われた。49er級はカーボンマストになってから強風でも普通に走れるようになり、ハイパフォーマンスぶりを猛烈なスピードで発揮している。牧野・高橋組は強風域ではまだ上位に食い込むだけのスピードとハンドリングがマスターできていないが、確実に走れるようになり、昨年から大きな進歩をとげている。そして、得意な風域である10ノット以下の時は第13レースで6位、第14レースで2位をとり、上位国と遜色ない走りを見せた。

オーストラリアとニュージーランドが圧倒的な強さで1位、2位をとったが、どちらのチームも基本動作をしっかりマスターしている。オーストラリアは北京オリンピックでも優勝候補だったが、金メダルをとりそこね、今回は石橋をたたいての準備をしてきたと聞いた。3位のデンマークは、前回金メダルをとったチームを破って代表になっただけに、激しい3位争いを制してのメダル獲得となった。牧野・高橋組はデンマークといっしょに事前練習を重ねてきたが、日本に練習相手がない環境では海外に練習の場を求めるしかないであろう。オーストラリアとニュージーランドが合同練習を繰り返しながら世界一となったことにも注目したい。

◆ RS:X 級男子(富澤 慎)

7月31日から8月5日まで10レースを行い、8月7日がメダルレースであった。RS:X級は大会主催者が準備した艇を使う(チャーター艇の供給)クラスであった。

富澤は自分なりにチャーター艇を受け取ってからの準備を考えていたが、実際に艇を7月18日に受け取ってから初日のレースまでの間、自分のスピードが出せない、ボード(板)のフィーリングが違っていると、自分の中で整理ができずに困惑していた。

そのまま大会が始まってしまったという印象であるが、15ノット前後の風は自分の道具を使ったとしても苦手風域になっており、最終レース以外がその風域であったことが富澤の結果につながっている。

今大会では道具に対する各国からの不満が多く、かつ組織委員会供給のチャーター艇ゆえに禁止や制約事項が定められていた。自分の道具だと普通に作業できる点も、全て許可

を得て書面で申請という面倒なもので、勝手に変更すると違反となる始末であった。

富澤は最初から最後まで、「道具のせいなのか、自分のフィーリングのせいなのか」を問いかけたままであった。細かい調整になると自分達だけでは答えが出せない状況であり、本人の自己流に落ち着くしかなかった。結果は、スピード勝負にならず、25位前後が定位置になった。

北京オリンピックで富澤は10位に入っているが、その時と同様に風が弱くなった最終レースでは4位をとっている。3月にスペインで開催された世界選手権では20ノットオーバーの強い風域でレースとなり、そこでも14位と走っていたことから、15ノットの風域でつかみきれなかったスピードが反省課題として残る。

◆ RS:X級女子(須長 由季)

7月31日から8月5日まで10レースを行い、8月7日がメダルレースであった。男子同様に組織委員会供給のチャーター艇のため、道具の準備に悩まされた。須長はRS:X級女子の中では体重が重たいほうに属し、プレーニングに入るのがやや遅くなる。そのため、本番にむけて減量につとめ、対応できるように努力した。

女子選手の特性かもしれないが、道具の準備は難しい。自分の艇では慣れ親しんだ調整がチャーター艇ではできないとなると全てが空回りしだす。特に問題となったのはマストの硬さで、これは与えられたものを使いこなせるかどうか勝負となる。須長は自分が得意とする風域でのスピードが出せず、セールの開り方や展開の仕方を工夫してみるものの、上り角度がとれなかったり、つまりぎみで逆に上りすぎてとまっていたり、基本となるチューニングが見つからないままレースに臨むことになってしまった。

優勝したスペインはどうかと見てみると、やはり女子選手は同じ点で苦勞していたようである。ただし、スペインの場合、事前に行われた別大会でチャーター艇をあてがい、それを短時間で自分のものに調整していく練習をして克服したという。とにかくフィーリングで片付けてしまいがちな調整ポイントを理論的に整理することによって確実にしていくことを、今後女子選手はしっかりマスターすべきである。

それでも須長は毎日あきらめずに調整を繰り返し、後半に少しずつ成績をあげてきた。オリンピック初出場であったため、チャーター艇に翻弄されたことが反省点である。減量だけでなく、道具についても事前に十分検討をしておく必要があった。

◆ レーザーラジアル級(土居 愛実)

7月30日から8月4日まで10レースを行い、8月6日がメダルレースであった。ラジアル級は組織委員会供給のチャーター艇であり、自分の道具はティラーとティラーエクステンション、ロープ類のみであった。RS:Xと異なり、ラジアル級は通常の世界選手権でもチャーター艇になるため、オリンピック大会用も普通に受取、準備をすることができた。

土居はユースからあがってきたばかりの18歳であり、体重を増量することが必要であっ

た。目標体重を設定し、五輪本番までには達成できた。しかしながら、持久力はユースレベルから一般トップアスリートのレベルでは差があり、体力面は短期間でいわゆるサイボーグ集団に追いつくには至らなかった。

ラジアルの前半 4 レースは 20 ノットオーバーのガストが入る South エリアで行われ、Harbour や Nothe でレースをしている風景とは全く異なる荒れた海面でのレースとなった。South は波も悪く、特に第 4 レースはサバイバル状況に見えるほどであった。土居は昨年までユースの大会しか出ておらず、ウェーマスでの経験はない。6 月に SFG 大会と合宿でウェーマスへ来たのが初めてである。毎日、レースを戦うことで精一杯なオリンピックであったが、若い選手には経験が必要であり、今後のプラスにしていくことが目標のひとつであった。世界の頂点がどこまで見えたかわからないが、今大会で最も厳しいクラスであったことは、最終日に 4 艇が金メダルを狙う争いになったことでわかる。

金メダルの中国は前回の銅、銅のベルギーは前回の 8 位と、何度もチャレンジしてきた。初日から終始トップを守ってきたアイルランドは最後のフィニッシュ直前でベルギーに抜かれて 4 位に後退した。

ラジアル級は艇差がなく、人間力が勝負の鍵を握るクラスである。強風なら体力勝負になるし、軽風ならハンドリングと風を見る力が必要になる。加えてダウンウィンドでのスピード競争に勝てるだけの技術をマスターしなければならない。

土居は課題が山積しているものの、10 代でオリンピックを経験できたことは貴重であり、今後のパフォーマンス向上にむけて更なる努力を続けてほしい。

5. 競技の総評と評価(反省)

《競技の総評》

今回の日本チームの結果は「470 級男女と RS:X 級男女は想定外。その他クラスはほぼ実力の範囲以内で終わった」と言い切ることができる。

結果としてメダルはもとより入賞すらできないままに終わった。代表選手たちは「肝心な本番で実力を発揮できなかった」「発揮するための力が無かった」ということだろう。本番にすべての調子をピークに持って行くいわゆる「ピーキング」でも世界に後れを取ったことを率直に認めなくてはならない。

金メダルを目指した 470 級女子は大会初日 2 レースを無難な順位 (9 位、5 位) でこなし 5 位につけ、上々の滑り出しであったが、2 日目の第 4 レースでは途中までトップに位置していたが「あり得ない」メインセール落下トラブルを起こし、自力で修理しフィニッシュするも最下位。その後、トップ 10 以内をキープするが、第 8 レース目にブラジルから抗議を出され失格に至り、結局予想もしなかった成績で終わった。

一方の 470 級男子についても、初日の失速から脱出できず、練習の成果を発揮することが最後までできなかった。これは、課題であったスタートの成功率が低かったこと、ダウ

ンウインド（順風）の帆走技術が改善できず上位を追い上げることが出来なかったことなどが反省点である。

RS:X級男子/女子はチャーター艇のギア（マスト・セール）が個々のセーリングスタイルにマッチせず上位選手と戦う力が不足していた。

49er級は日本国内で1チームのみの活動の中、オリンピック出場枠を獲得できたことは評価に値する。また、レーザージャIAL級は若干18歳の選手が代表選考を勝ち抜き今後の活躍が期待できる選手が発掘・育成できて来ている証しである。

《評価と反省》

4年前の北京と同じ失敗をしたくない、さらなる効果的な強化を進め、組織的に強くなりたいとの委員会委員全員の思いで選手強化事業に取り組んできたつもりである。

2009年からは国が選手強化に本腰を入れた一つとしてナショナルコーチ制度もスタートした。同職には企業チームコーチを離れ中村健次に就任を要請、勤務先からの出向が認められNFと企業・スポンサーが一体となり「勝利を目指し、メダルを獲得する」と考えたが、北京大会より悪い結果となった。

マルチサポートをはじめ数々の支援を得たにもかかわらず何故結果が残せなかったのか？4年前の反省を元に我々は組織力の強み（チーム力）を武器にロンドンを戦い、「勝利を手中にするはず」であった。

反省点としては、まずチーム・選手のピーキングの失敗が挙げられる。何故最良の状態で大大会に臨む事が出来なかったのかを十分検証する必要がある。

2つ目には、「選手と選手」「選手とコーチ」「コーチとコーチ」が連帯して、勝利へのモチベーションを上げることができなかつたことも挙げなくてはならない。強い意志を持って皆で連携し、戦うことができれば今回とは違う結果になったのでは無いかとの忸怩（じくじ）たる思いもある。

たとえば、代表監督と企業チームコーチとの微妙な部分については他競技でも共通のようであるが、これも今後の課題であろう。

また、役員間のコミュニケーション不足について別の反省点では全種目についてフィールドの責任者である中村健次ナショナルコーチの国内での現場対応の少なさが影響した可能性がある。JSAF組織としての選手強化への明確なビジョンが掲げられていない中、一部のオリ特メンバーが長期的視点で物事を考える必要に迫られ、そのために時間を費やすことが多くなったのも事実である。

もはや三度目の失敗は許されない。オリンピックで戦えるチームを作り上げるためには、NFの考え方が最も重要であると共に、ロンドンでの敗因を精査・検証しクリアしなければならないと考える。

これからすべき事は指揮命令、コミュニケーション、行動力が取れるべき人材を集めた組織体制の構築であり、その人材選出にはロンドンまでのオリ特・ジュニアユース育成強化委員会委員の意見を十分に聞き、議論をしたうえで考慮し、組織を構築すべきと思う。

さらに、我々はこれまで様々な準備をしてきた内容を再検証するとともに、これまでの方策では準備が十分でなかったことを認識しなければならない。選手が必死に練習した成果をよい成績に結びつけること、そして「本番で最大の実力を発揮する」ためには、現状の課題を克服することが必須であり、それらを克服するためには、もちろん現コーチ陣の質的レベルアップが重要であるとも考える。次回の競技種目の変更も決定している。そのための対応策も急ぐ必要がある。世界から謙虚に学ばなければならない点もある。

今後は「戦う NT から戦える NT へ」前進あるのみである。

今回で得た数々の教訓を謙虚に受け止め、それらを糧として「次に向かう」指導陣に徹底していかなければならない。

6. 2016年リオ・オリンピックに向けた課題と取り組み

2016年リオ・オリンピックは軽風域（過去データから）が予想され、日本にはそれなりアドバンテージがあると思われるが、自然を相手にする競技である以上、基本はオールラウンドで戦える選手の育成・強化が必要であると考えます。

そのためには、まず「チームジャパン」としての在り方、結果を重視した強化方針を打ち出し、NFと選手、支える企業、団体、地域との密な関係を構築しなければならない。

■具体的実施項目

前述《評価》記載事項と重複する部分は有るが以下を具体的に推進する必要がある

1) 選手確保

強化重点種目である470級はロンドンを終えた代表選手の継続が見込めないことから、才能ある選手探し、若手選手育成を行い、国際競争力を高める必要がある

2) 選手環境確保

オリンピックという大きな目標に向かうためには、選手の活動環境（受け皿＝有力企業）が必要不可欠である。これまでもみられた「スポーツを支援する」企業雇用確保が優先となるが、併せて契約といった形での活動も視野に入れなければならない。

3) 財源確保

ロンドンの成績結果からこれまでのような潤沢な補助金（国庫）が見込めなくなる（20%減予想）可能性がある。またNF負担分の経費、スタッフの活動費用捻出等のために、寄付金増額を意図した取り組みが必要になる。これこそ「実力あればこそ」であ

り、また「スポンサーメリットあってこそ」である。詳細は今後の検討となるが、“身の丈に合った”寄付金確保のための戦略的マーケティング活動を展開するべく努めたい合わせて、現行ナショナルチーム規定の改定を行ない、その中に広告に関する規定（NTの義務等）を盛り込む事を検討する（ルールの特明確化）。

4) 広報活動

これまでの広報活動の手法を継続すると共にソーシャルメディア等の新しい情報ツールの導入も検討する。

5) 選手強化

これまでの企業重視活動を検証し、NFとの連携でより幅広く情報共有できるシステムを構築すると共に、時にはユース世代からナショナルチームまでを一堂に会し、強化練習（合宿）を実施することなども考慮し、長期的かつ効果的な強化活動を展開していきたい。これらの実施を通してコミュニケーションの向上も図る。

- ① ルールに強くなるために、NT選手はB級ジャッジ以上の取得、今回の敗因を素にした講習開催。
- ② **Clever** 且つ **Smart** な選手育成（レースで結果を出すために賢く、きびきび判断できる選手育成）（そのためには過去の体験や他国情報の選手への伝達が必要）
- ③ 国内強化活動の充実（競争原理の活用）
「提案」これまで結果を残した選手の復活を促す。加えて若手選手の発掘育成をシームレスな形で強化する。

6) 指導者強化

- ① 4) を遂行することで多くのコーチ間での情報共有を行い指導者レベルの向上を目指す
- ② 海外指導者（成功者）招聘を行い、抜本的な指導方法の情報収集・研修会を行う
- ③ 学校、地域クラブ指導者とのコミュニケーションを密にすること、また指導方法・練習の情報提供をおこなう

7) 競技力評価の仕組みづくり

8) 代表選手選考方法(時期)

リオ・セーリング会場の風域&特徴を把握した上で、2013年度内には選考方法の発表を行う

9) リオ・オリンピックに向けた主要役員の早期決定

10) 情報収集

- ① ブラジル現地情報の収集
- ② 現地協力者（団体）へのアプローチ

③ ロジスティックの確保

11) 組織体制

- ① 新委員長の就任に伴い、2013年度の各スタッフの決定を行うと共に、本委員会の趣旨に賛同し協力意志を持ったメンバーを募る
- ② 選手強化・普及等にかかわる JSAF 各委員会との連携を図り、組織基盤の強化を推進する

7. その他

添付資料：資料1 国立スポーツ科学センター（JISS）サポート活動報告

資料2 ロンドンオリンピック・マルチサポート報告（鹿取）

（1）ウェーマス風調査

（2）470級マスト開発

（3） // セール開発

（4） // 艇体性能解析

資料3 ロンドンオリンピック・コンデショニング報告（江口/前田）

資料4 ロンドンオリンピック現地栄養サポート報告（武田）

資料5 ウェーマス潮流調査報告（東大潮チーム）

資料6 選手レポート纏め（中村/飯島）

【別紙】：ロンドンオリンピック成績（種目別、国別）

以上